No.12

古高取通信

平成24年 6月

古高取を伝える会会報

目　次

平成二十四年度定期総会 ・・・2
新任の紹介 ・・・・・・・・・・・・・2
古高取の広場 ・・・・・・・・・・・・3
活動の記録 ・・・・・・・・・・・・・6
なんでも掲示板 ・・・・・・・・・・・7

「今年もぶれることなく！」

鷹取　宗恵

私が子供の頃に読んだ「少年画報」という漫画で、今でも覚えている物語がある。

ある漁師町で五人の悪餓鬼が学校をさぼって、舟を沖に出し魚釣りを始めた。面白いように魚が釣れて夢中になり、時が経つのを忘れた。晩秋のつるべ落とし、みるみる辺りが暗くなった。すっぽりと闇の中に包まれて、少年達はあわてた。

その中でタバコを吸う者がマッチを擦って燃えるものをかき集めた。その火は闇を破り周辺を明るくした。皆安心したが、一人の少年が激しい声で「その火を消せ」と叫んだ。その剣幕に押されせっかく燃え上がった火に海水をかけた。再び闇が襲ってきた。しかし、その闇に目がなれてくると、はるか彼方に小さな人家の灯が見えた。「あそこへ向え」と、五人は懸命に舟を漕いで助かった、という物語である。

今年度もぶれる事なく、四つの活動の柱に取り組んでまいりたいと願っています。

『春の田のごとく原稿用紙あり』

渡辺　隆

平成二十四年度 定期総会

〈平成二十四年五月二十日（日）〉
場所：直方市中央公民館 三階
第三学習室
記念公演：陶工として生きる
講師：高取八仙氏

出席 三〇名、委任状 二八名

平成二十四年度の定期総会が開催され、新役員と新年度の事業が承認されました。

また高取焼資料館及び内ヶ磯窯開窯四〇〇年の取り組みについての質問がありました。

どちらも大きな課題であり、充分議論を重ねながら一定の方向性を打ちだしたいと考えています。

新役員は次のとおりです。

会　長　隅田 知明
副会長　鷹取 宗恵
　　末松 登志子
理　事　梅本 靖
　　副島 邦弘
　　向野 志津絵
　　柴田 ムツ子
事務局長　永富 セツ子
書　記　倉田 豊子
会　計　吉田 佳代子
監　事　東 陽一
　　永冨 準一

新任の紹介

直方のまちづくりに励みたい

隅田 知明

直方の宝「古高取」も、意外と知らない人が多くいると思います。

私は、福智山建設事務所に赴任した時初めて内ヶ磯窯跡の存在を知りました。

今は展示されていませんが、東京国立博物館で宅間窯、内ヶ磯窯の出土品が沢山展示されているのを見て驚いた記憶があります。私の所属する劇団で高取八山を主人公にした「八山炎の旅立ち」を上演した事も忘れられない思い出です。

国指定級の古窯跡の存在で、ダム計画が無くなった事例も有ります。内ヶ磯窯跡もそれに匹敵するのではないかとの指摘もあり複雑な思いです。

朝鮮陶工と日本陶工との異文化の交流の中で花開いた古高取の歴史と、今直方で高取焼を継承しようと頑張っている窯元との接点を探りながら、古高取を伝える会の運動が、直方のまちづくりに少しでも寄与できればと願っています。

しっかり定着してきた「次世代へつなげる」活動

永冨 セツ子

今年で本会が発足して五年目に入りました。

子供焼物教室で一年目にお茶碗作りをした子供達はすでに中学三年生となりましたが「古高取」の授業やマイ茶碗作りのことは、今でも小学校時代の貴重な体験として心の中に深く残っているものと思います。

そして地元直方が高取焼発祥の

地であることを周りに伝えて行ってくれることでしょう。

また学校が焼物教室を授業の一貫として位置づけ、先生方の事前授業がしっかりなされてきたことも「次世代へつなげる」活動に繋がっていることでとてもうれしく思っています。

さて、私事ですが、本年度より事務局長として活動することになりました。

各部会がスムーズに推進して行けるように努力して参ります。「古高取を伝える会」が直方の住みよい町づくりに大いに貢献して行くことを目指し、会員の皆様と共に頑張って参りましょう。

ご挨拶

柴田　ムツ子

く「六十年前、自分が陶芸の世界に入った頃は、女性の陶芸家の存在はなかった。その頃は登り窯しかないから大変な肉体労働で、女性には無理と思われていたし、女体は、穢れているから焚いている最中は、火の神様のいる窯によるなといわれて戸惑った」と

しかし、作陶器に熱中し、のめりこみ、後に引けない状況になり、全国の女性達に呼びかけ「女流陶芸」という会を結成、主宰しているとのこと。

さらに、器を作るときはそれに盛る料理も出来なければいけない、また、陶芸用の道具は昔は自分の周辺にあるもので道具を作っていた。寸法を測る道具も竹を削って云々

なかなか面白い人だなと思いつつ、古高取が作られたころの道具はどんなものだったのだろうか？とか、その頃の女性はどういう形でかかわっていたのだろうか？想像するのも面白い。

今年から理事としてお手伝いさせていただきます。

坪井明日香という女流陶芸家曰

幹事の一人となって

永冨　準一

人生七十年を過ぎると、あとは坂道を転がるように老いのるつぼに吸込まれ。喜寿の祝いも夢の中、果ては、長寿会からの傘寿祝いの洗礼に、たじろぐ今日です。さて、傘寿の傘は何を意味するのだろうか。口は出しても体は動かんのが老いの現象。せめて、破れ傘にはならないいように、自重しつつ頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

古高取の広場

高取八仙氏をお迎えして

副島　邦弘

平成二十四年度定期総会の基調講演は、小石原高取窯元の高取八仙氏を迎えて開催した。

氏は小石原皿山区の南に位置する中野の高取焼の窯元である。高取焼の八乃丞系に属している。『筑前国続風土記』には「元和二年（一六八二）初めて上座郡小石村の南、中野と云所に国君光之公陶器を作らしむ。是は肥前松浦郡伊万里の陶工来り伝う。大明の製法にならえる也」とあり、『高取歴代記録』には「寛文九年（一六六九）白旗山から掛勤めで鼓釜床に来ていた初代八蔵の孫である八乃丞が小石原の内中野に売買の新皿山が出来しころ、ここに移り住む」これが小石原皿山で、小石原焼の出発点である。

福岡県には上野焼、高取焼という国焼がある。しかし、これが連綿と今日の盛況を維持してきたというわけではない。共に藩窯であったため、明治維新の廃藩置県で禄を失い苦境におちいり、やむなく休止していた期間さえあった。

第二次大戦が始まる頃、先ず上野焼は炭坑の好景気を背景に需要がのび、新窯があいついで開かれた。高取焼亀井味楽窯（福岡市）はすでに戦前から茶陶で知られていたが、戦後になって小石原の鼓に高取焼の復興がなされた。小石

原焼は八軒の窯元が共同で一軒の個人窯で運営されていた。

昭和三〇年代の中頃に個人窯を築くのが認められ、以来新規個人が続出した。それのみでなく、他地で修業した人や独自にやきものづくりを試みるようになった人なども多くなり、小石原には現在五十を超す窯が築造されている。

昭和三十年代後半から芸術的な作陶への自覚がうまれ、県展・日展や日本伝統工芸展に挑戦するようになっていった。

昭和四十年に西部工芸展が開設され、これが陶工の登竜門になった。また、昭和六十年夏に福岡県陶芸作家協会も生まれている。

高取焼八乃丞の系統である高取八仙氏の「陶工として生きる」の講演内容の中心は八仙氏の生い立ちから、戦後の苦労した時期と、美和弥之助氏に指導を受けたことについてであった。

昭和二十五年に中学校卒業と同時に家業を継承した時は、半陶半農（三反百姓）で食べるのがやっとであった。子供の頃から祖父母に陶器の手ほどきを受け、母親の激しい指導で修業を行なった。この頃は農業が中心で焼物は従であった。八仙氏の本姓は福島氏で、小石原焼の共同窯の窯元の一つであった。祖父が高取家に入籍し、高取安乃丞重宜家の名跡を継いで高取八扇を名乗った。その後を八仙氏が継承した。（藩御用陶工高取重宜―高取八扇―高取八仙となる）

小石原の職人は、一日に一尺擂鉢八〇・八寸擂鉢百・一升徳利八十コを作ることが一人前陶工であった。昭和三十年前半までは、窯元は一子相伝で、窯元の次・三男がまわり職人として、一個いくらで請け負って窯元九軒をまわっていた。窯元は、ロクロ技術は下手で、まわり職人が上手であったという。薪については国有林の雑木の払い下げであり、毎年地区を限定して伐採作業を実施していた。その作業は重労働だったが昼の弁当は楽しみであった。その後の薪作りも大変で、土作りと薪作りが窯元の相伝の権利であった。焼物の作りには、土一に対し薪十が必要であった。ロクロの作業は、雨の日や冬場が中心に行なっていた。

小石原焼の伝統的な共同体的生産形態は昭和三十年代になって崩壊した。原因は市場拡大による各窯元間における生産量の増大と窯元の分家の動きである。共同窯の崩壊にともない、窯元たちは競って個人の登り窯を築き、また分家が認められることによって窯元の増加と小石原焼の生産量の増大への道を大きく開いた。従来の小石原焼の労働形態は三代が同居する大家族的な家族労働が主体だったが、機械導入と分業の進展は豊富な家族労働を保持した小石原焼であっても対応できなかった。家族労働を補うものとして新たに雇用労働が加わり、職人は、村内からも集まってきた。これは民芸運動から「民芸ブーム」へとの社会現象の変化があったものであった。

八仙氏は茶入・茶碗等の茶陶修業は昭和二十八年に茶入を三十年代は茶碗の井戸茶碗を中心に作った。これには美和氏の指導で、内ヶ磯土と小石原真砂土を使用した。また後年筒型の掛分け茶碗では小石原土と小石原真砂土に唐津の岩根石を使用して、作り上げた。

高取の茶入の作りは内ヶ磯窯は唐津写の左糸切りで、白旗山窯は左・右両目があり、小石原は右糸

唐物茶入 銘 博多文琳
福岡市美術館 特別企画「大名茶陶―高取焼」展図録より

切で和物である。左手で引き上げて右手で糸を切るもので、肩衝茶入を作る時には〝夢中〟になって一日百個作る。

文琳茶入も同じ器種を一日かけてつくっていくものである。

「福岡市立美術館の大名物、博多文琳の感じは化粧入の小壺を茶入に転用したもので、唐物の切りぱなしで、指痕がついて、削りがなく粘土は簸の強いものである。」という見解を述べられ興味を引いたものであった。

小石原焼については昭和三十年前後に米兵による帰国土産として、日用雑器の徳利がスタンドにということで特に売れた。徳利に酒屋の屋号が入っているのは明治後半頃からの依頼の品で、現在も続いている。

物つくりには、心を入れて、技を磨き、体調を整えて行くことが大切で、苦労を苦労と思わず自分の仕事として今後も職人として生きて行きたいと結ばれた。

おにぎりにこだわって

荻迫　喜代子

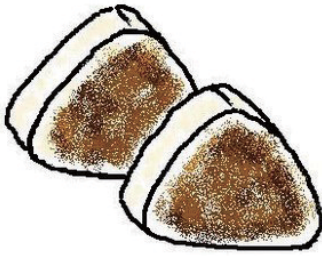
昭和二十年の三月十一日、東北大震災と同じ日ですが、当時学生の私は東京から帰省する日でした。

前夜は激しい大空襲で、東京はほとんど焼き尽くされ、あちらこちらは残骸がくすぶり続けていました。

私は赤羽の友人宅に下宿していましたが、この夜の空襲はまぬがれましたものの、数日後には焼失しました。帰心矢の如しの一念で東京駅までどう行こうかと迷いましたが、線路をたどる以外に歩くところがありません。焼けた熱い線路の上を黙々とたどりました。列車や貨物列車もすべて焼けて、骨組みだけの無残な状態でした。神田川では石炭運搬船が真赤な？ガラ？になって浮いていました。やっと東京駅にたどり着きましたが、駅はガランドウで東海道線は品川駅からの発車ときき、又歩いて品川に着いたのは夕刻に近かったと思います。ホームには焼け焦げた防空頭巾をかぶり全身真黒に焼けた人達ばかりで溢れていました。地方へ避難する方達です。皆無口でおし黙ったまま列車の到着を待っていました。

私はフト、おにぎりを沢山持っている事に気付きました。私が九州まで帰ると云うことで、当時数日かかるだろうと友達はなけなしの麦ごはんを炊いておにぎりにし、味噌をつけて焼いたものを持たせてくれました。何よりも貴重で有り難い食糧でした。真黒になっている子供達がふびんで一ヶづつ配りましたが、あの時の初めて見せた笑顔は忘れられません。気付いたら自分のものまで全部配り、それから四日目に自宅へ帰り着きましたが不思議にひもじさは無く、途中は水だけで過ごせました。

この様な経験から、にぎり飯には深いこだわりがあります。おいしく握るコツは、先ず熱いご飯である事です。冷たいご飯はうまく握れません。又混ぜものの多いご飯、つまり昔の糧飯（雑穀めし、大根めしなど）は握るのに苦労した事でしょう。炊きたてのご飯は、ほぐして息をぬき、手をよく洗って掌に塩をつける。ふんわりとのせたご飯はやや締めて握る。二つ目からは塩のみで握ります。水をつけたり、塩水をつけたりではうまい握飯にはなりません。ご飯の湯気で塩がとけ、おいしいおにぎりになるのです。ご飯の熱で多少掌が赤くなるくらい我慢して作ってみてください。握飯には梅干、たくあんが似合いのものですが、握ったむすびの周囲に自家製の麦みそをなすりつけ両面を焼きます。味噌の焦げる香りが何とも云えませんし保存性も高くなります。



私は大きい高取焼の皿にハランを二～三枚敷き、おむすび、玉子焼、椎茸や筍、高野豆腐などの煮染め、たくあんを盛り合わせて、素朴な中に温かい昼食のもてなしをしたりします。握飯のおかずは、あまり凝りすぎない方がおいしくいただけるような気がします。

「遠州好み」って「古高取」？

小山　亘

私は疑問に思ったらほっておけない性質である。十八才の時備前焼から桃山茶陶に本気でのぼせて三十四年が過ぎた。陶器の追及は泥沼というがそのとおりである。

前回は古高取内ヶ磯窯を当時何と呼んでいたのかを調べてみた。今回は「古高取」と「遠州高取」の棲み分けについてである。

現在は、初期の宅間・内ヶ磯窯時代のものを「古高取」とし、白旗山窯時代のものを「遠州高取」としているが、内ヶ磯窯から「遠州好み」が出土しているのである。これは可笑しい話！「遠州高取」は「古高取」の一部とした方が良いのでは？

文政十年（一八二七）草間和楽輯録『茶器名物図彙』巻四十一

国焼の類・茶入之部　筑前高取の一節に

「・・・名高きハ秋の夜・手枕・横嶽・染川等ミな〜古高取なり」とある。

草間和楽は、江月宗玩が名付けた「秋の夜」・小堀遠州が名付けた「横嶽」・黒田忠之が名付けた「染川」を「古高取」と記しているのである。この三茶入は将軍茶道師範小堀遠州選定の中興名物、すなわち「遠州好み」の高取焼の茶入である。

MOA美術館 収蔵

要するに、草間和楽は、「遠州好み」の高取茶入を「古高取」と言っている。茶入の急所は口・耳・底形で、この三ヶ所が三茶入と類似する形状や陶器の要となる素材（胎土）の選択や精製方法、ロクロのさえが内ヶ磯窯跡から出土するものに近い。そうなると内ヶ磯窯で焼かれたとしても不自然ではなく、むしろその可能性が高い。それに加えて、前回紹介した『黒田忠之判物写』の内容と次回紹介予定の江月宗玩の「秋の夜」の命名についての記録やこれらの三茶入の目利の報告書といえる遠州が忠之に宛てた書状の内容からすると、この三茶入は「古高取」を焼いた内ヶ磯窯のものとするのが相応しく、出土状況とも符合する。現場の証拠となる多くの資料から考えても、「遠州高取」は内ヶ磯窯から始まった「古高取」の一部とするのが適切であることになる。

自然・宇宙と共生することで豊かな教養と高い精神性を育んできた日本文化が世界の人々から注目されている現在、世界に例がない我が国独自の総合芸術茶の湯を支えた最大級の茶陶窯内ヶ磯の研究施設と史料館は何よりも時代が要求しているものと言えそうだ。「百聞は一見にしかず」というように、本物を見ることは重要で、これ以上のことはない。

活動の記録

●地域対象焼物教室〜更正保護女性会〜

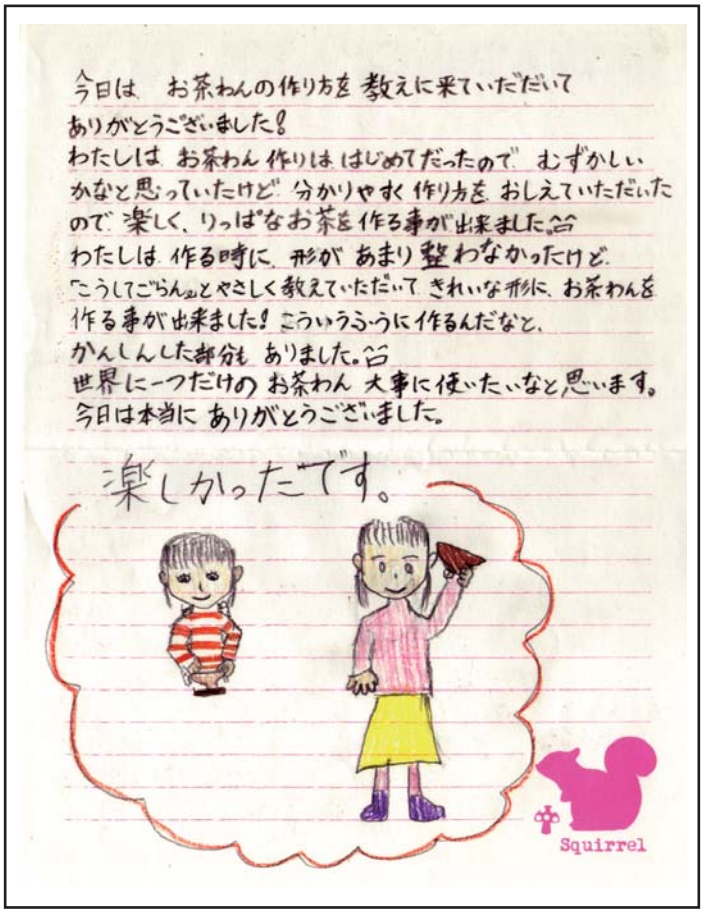
〈平成二十四年二月十七日（金）〉
場所：須崎公民館（直方市須崎町）

更正保護女性会から十五名の参加がありました。楽しいひとときでした。出来上がりがとても楽しみです。

●地域対象焼物教室〜福智台団地子供会〜

〈平成二十四年三月二十日（火・祝）〉
場所：福智台団地（直方市感田）

福智台団地の子供会から十二名の参加がありました。みんな頑張って作っていました。子供達から感想文など頂きましたので、少しだけ掲載させて頂きます。


今日は、お茶わんの作り方を教えに来ていただいてありがとうございました！
わたしは、お茶わん作りは、はじめてだったので、むずかしいかなと思っていたけど、分かりやすく作り方を、おしえていただいたので、楽しく、りっぱなお茶を作る事が出来ました。
わたしは、作る時に、形が、あまり整わなかったけど、「こうしてごらん」とやさしく教えていただいて、きれいな形に、お茶わんを作る事が出来ました！こういうふうに作るんだなと、かんしんした部分も、ありました。
世界に一つだけのお茶わん、大事に使いたいなと思います。
今日は本当に、ありがとうございました。
楽しかったです。
Squirrel

なんでも掲示板

●子供焼物教室のお茶会

〈平成二十四年一月～二月〉

昨年、子供焼物教室で焼物を作った小学校が、相次いでお茶会等を催されましたので、掲載させて頂きます。

「直方南小学校」

〈平成二十四年一月十三日（金）〉
場所：直方歳時館（直方市新町）

「直方西小学校」

〈平成二十四年一月十七日（火）〉
場所：直方歳時館（直方市新町）

「植木小学校」

〈平成二十四年二月二十八日（火）〉
場所：植木小学校（直方植木）

各小学校の六年生の皆様が作った〝マイ茶碗〟は、それぞれ形もよく上等に出来上がり、その茶碗でお茶会が開催され、毎回お手伝い出来る事をうれしく思います。

子供たちの真剣なまなざしと初めて抹茶を頂くお子さんもいる中「あ～おいしかった」と声が響くと微笑ましい光景が広がります。

茶碗の製作で作る喜びを感じ、茶碗を使って茶会という集う場所で和を学び、準備などをしてくださった方々への感謝の気持ちを持つ事、すべてが子供たちの学びの場になっていれば幸いです。

来年もまた〝マイ茶碗〟を使ったお茶会で子供達と〝一期一会〟の出会いがある事を楽しみにしています。

田中　紀子

●第四十四回　高取焼陶器まつり

〈平成二十四年四月二十七日(金)～二十九日(日)〉

場　所：直方市畑・永満寺地区

直方の地元窯元や畑公民館等で、陶器販売はもちろん、地元の農産物や特産物等の販売も行われました。毎年、春と秋に開催されています。

●第七回　ほたると小さな音楽会

～癒しの歌声～ハープの音色にのせて

〈平成二十四年六月二日(土)　開演　午後七時三十分〉

場　所：明元寺（直方市永満寺）
出　演：和嶋静代（ボーカル）
　　吉武真理（ハープ）
　　大川千端（ピアノ）
会　費：千五百円
問合せ：〇九四九－二四－九九三七
　　（明元寺）

今年で七回目となる「ほたると小さな音楽会」が高取焼の古里で開催され、素敵な音楽と自然で来場者を楽しませてくれました。

～・～・～・～・～・～・～・～

〈掲載内容募集〉

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。掲載可能な情報等がございましたら、事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

あっと言う間に六月になってしまいました。今回、会報の発行が予定よりも遅くなりまして申し訳ございません。

より多くに皆様に古高取や高取焼のことを知って頂きたいと思います。その為に、ますます多く皆様にご意見・ご要望・情報提供を頂けるように会報やホームページ等を改良して行きたいと思います。現在、簡易バーチャル博物館の制作も検討中です。興味のある方は、ぜひ広報部会に参加してください。今後とも宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO12

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
平成二十四年六月十五日

〈現在の会員数〉
正会員　八十九名（九十口）
賛助会員　二十二名（三十二口）
団体　二団体（三口）

〈マイ茶碗の数〉
3761個

〈事務局〉
〒八二二－〇〇二六
福岡県直方市津田町七－十四
TEL　〇九四九(二三)一三一一